

令和6年度第1回 徳島県スポーツ推進審議会 議事録

I 日 時

令和6年11月1日（金） 午後2時から午後3時45分まで

II 場 所

徳島県庁11階 審問室

III 出席者

【委員】20名中15名出席

高原清秀会長、三浦哉副会長、相原佳子委員、伊藤舞委員（リモート）、
岩野眞士委員、岡部裕子委員（リモート）、奥谷圭介委員（リモート）、
表原愛真委員、木村美海委員、駒居鉄平委員、鶴真美委員（リモート）、
二宮あゆみ委員、松浦康委員、柳澤良和委員、山田和弘委員

【事務局】観光スポーツ文化部副部長、スポーツ振興課長、スポーツ交流課長ほか

IV 内 容

開会

会長・副会長選任

会長に高原委員、副会長に三浦委員を選任

議事

- (1) 令和6年度スポーツ関連施策の状況について
- (2) 徳島県スポーツ推進計画の進捗状況について
- (3) その他

閉会

《配付資料》

- | | |
|-------------------------|-----|
| ○ 令和6年度スポーツ関連施策について | 資料1 |
| ○ 徳島県スポーツ推進計画の進捗状況等について | 資料2 |
| ○ 徳島県NPB開催実行委員会の取組について | 資料3 |

V 議事録

開会

☆会長

それでは議事に移りたいと思います。

議事（１）令和６年度スポーツ関連施策の状況について、議事（２）徳島県スポーツ推進計画の進捗状況について、まず事務局より、議事（１）議事（２）を合わせて説明をお願いいたします。

◆事務局

資料１、２に基づき説明

☆会長

ただいま事務局より説明をしていただきました。委員の皆様方それぞれ御専門のところがあって、特に、御専門の詳しいところについて、お目通しをもう一度いただいて、御意見、御質問等いただけたらと思います。毎回この会議のほうでお願いをしていることなんですけれども、できるだけ多くの委員の皆様から声を頂いて、事務局のほうにお答えいただくと、そういうような形で今回も進めたいと思います。どうぞ、積極的な御発言をお願いしたいと思います。

○委員

子どもたちの体力向上ということで、勤務しておるのが小学校ですけれども、いろいろな県の事業に参加させていただいたりしながら、子どもたちの体力向上に努めております。

ただ、本当に気候の問題もあって、熱中症指数が危険になると休み時間も外に出られない、体育の運動もできないということで、空調の件も施策のほうで出ておりましたが、中学校から順にというようなお話も聞いております。できるだけ早くそういった環境整備のほうも、小学校も進めていただきたいと感じております。

◆事務局（スポーツ振興課長）

体力向上という部分で、小中学校の環境、空調をできるだけ早くしてほしいとの御意見いただいております。

教育委員会の事務方も今日参加しておりますけれども、昨年度、まずは県立高校の体育館の空調の整備をやっていこうということで、現在も計画的に進めているところでございます。また、小学校、中学校となりますと、市町村の教育委員会のほうになりますけれど

も、新聞報道ですと、中学校の体育館で移動型のクーラーを設置しているところもあるようです。特に今年の夏は異常気象というか非常に暑かったので、その辺りも対策はとっていかないといけないということで、環境整備、熱中症対策についても、御意見いただいた点を踏まえて進めていきたいと考えております。

◆事務局（体育健康安全課班長）

熱中症対策ということで、私どもは熱中症予防についての立場からお話をさせていただきます。

委員おっしゃるとおり、地球温暖化で急激な異常気象が、特に今年は非常に夏も暑かった状況が続いております。県教育委員会でも、毎年文書による注意喚起等をさせていただいております。また、熱中症の講習会ということで、各小中学校、高校に熱中症の講習会等も行っております。

また、本年5月には、学校における熱中症対策のガイドラインを作成し、子どもたちが快適な状況でスポーツ活動や授業を行えるような環境を作りまして、事故防止に努めているところでございます。引き続き、児童生徒の安全を第一に、適切な対応を徹底してまいりたいと思っております。

○委員

今の熱中症のところで、僕もちょっとこういう対策どうかなと。製氷機が、各小中高にあるのかなと。氷があれば熱中症とか体調不良があった場合に、グラウンドとかで氷でアイシングして、という緊急の対応もできると思うので、そういう設置とか。あと、高校にトレーナーで行かせてもらっているのですが、やっぱり各校1台しかなくて、運動部が取り合いになり、空っぽになって、次の日見ても底のほうにちょっと新しい氷ができていう状況なので、活発な運動部のある高校では、2台、3台とか、そういうところも御配慮いただければ、というところを教えていただければ。

◆事務局（体育健康安全課班長）

ただいま製氷機について御意見をいただいたところです。

部活動や体育の授業におきまして、氷等で体温を下げるというのは非常に効果的な方法だというふうに思っております。ただ、なかなかそれが設置できていない高校、小中学校もあると思うんですけども、すぐに全ての学校に備えるということは、現実的にはまだまだ難しいところもあるんですけども、頂いた御意見でございますので、実現に向けて、どういうふうにしていったら実現できるのかとか、今、学校でどんな課題があるのか、というのを研究いたしまして、熱中症の予防とか、子どもたちの快適なスポーツ環境、授業環境がつかれるのか考えていきたいと思っております。

○委員

いろいろあるんですけども、まず、最近のことで言いますと、国スポに関して、存在意義・価値観について、皆さんの捉え方はどうなっていますでしょうか。競技団体等にも、これから聞いていこうと思いますが、国スポでこれからも順位を争うのか、今回は若手の躍進が目立ったわけですが、育成に軸を置くのか、今後の方針をお聞かせ願いたいと思います。

◆事務局（スポーツ振興課長）

国スポについてですけれども、委員おっしゃられたとおり、国民スポーツ大会も、都道府県で順繰りで開催してるんですけど、2035年に、それが三巡目を迎えるということで、それを契機に国スポの在り方をもう一回見直そうという動きが、出ております。特に、今問題となっているのは、開催県の負担が、財政的にも、人的な面でも、事務的な面でも、非常に負担がかかっているということで、その大会自体をどういうふうに見直すかということ、あと皆さんもちょっと感じてるかもしれませんが、国スポが、いろんな選手が目指す大会に本当になってるのかということもあって、例えば高校野球だったら甲子園があるし、サッカーだったら高校選手権があるしということで、国スポが全ての選手が目指すようなところになってないという現状もあって、そういった声もあって今見直しがあると。主催者は、日本スポーツ協会（J S P O）と開催県、それから国となっておりますので、今、J S P Oが有識者会議を設置して、その在り方について検討、議論がされているというのが現状です。その中でも、委員おっしゃられたとおり、都道府県の総合順位をつけるべきなのか、というか、つける必要があるのか、という議論も同時にされているところでございますので、今後それがどうなっていくのかというのは、我々も注視しながらやっていきたいと思っております。

少年の活躍等の今後の取組方については、当然競技力の向上であるとか、国スポは県を代表して選手を派遣しておりますので、その選手の皆さんが、しっかり力を発揮できるような環境は、県としてもしっかり支援していきたいと考えております。特に、本県は企業のスポーツ、実業団がすごくあるわけでもないですし、私学が他県のようにすごく活発にやっているというわけでもないです。四国大学さんとか、いろいろ頑張っただいてるんですけど、他県と比べたらその部分、課題があるので、やはりジュニア、小中高生をいかに底上げしていくかということ、県としても力を特に入れていきたいと思っております。国スポがどういう議論になっても、そういう子どもたちの競技力の向上に向けては、しっかりやっていきたいと考えてます。

○委員

私も今の話の続きにはなるんですけど、競技力向上というところで、私もサッカー専門でずっといろいろやらせてもらって、何十年も前から課題には出ているんですけど、指導者養成。選手を育てるより、先に大人の指導者を養成したほうが、選手育成の近道になるんじゃないか、ということもありまして、サッカーとかでもいろいろ指導者養成には力を入れているんですけど、逆に、徳島県として、取組はどのようなものがあるのか。

ということと、中学校のトップアスリートの流出。これも現実的にいろいろ見てきてはいるんですけど、Ｊリーグ含めてサッカー選手はＪリーグのほうへの流出。あと中学校の部活でやっても県外。結局、高校なったときには、逆に県外からの、徳島市立見てもわかると思うんですけど、もうほぼ県外から受け入れているという状況の中で、その流出に対して何か施策があるのかどうか。

あと、選手育成というところで、私いつも思うんですけど、インディゴソックスさんとかは、これプロの大人になるんですけど、NPBのほうに毎年あれだけの人数を輩出するというのは、何か多分そこに育成のヒントがあるのかなといつも思っていて、来た選手が、1年、2年間でプロに行けるだけの力をつけるというところで、科学的にもいろいろ多分やられてると思うんですけど、そういうところに何かヒントが隠されてるのではないかというのをいつも感じております。

○委員

一つはまだ未熟な子たちなんですけど、選手たちも、もちろん子どもたちもそうなんですけど、そこに一つの考え方をしっかりと当てはめる。まず、どうしたいか。インディゴソックスに来る選手達は、もちろんプロに行きたいという考えから、何が足りないかというのをしっかりと考えさせて、その上でトレーニングなり練習なりをさせていく、というのが最も大事なところかなと思ってます。そこをしっかりと、球団とチームとメディカルサポートもいますので、その3つがしっかりこの選手には何が大事かというのを、こういうふうにしていったらという目標設定じゃないですけど、それをしっかりと明確にした上で、練習、試合に励むというのを、まず一つ大事にしています。そこがうまくはまっているのかなというのがあります。

◆事務局（スポーツ振興課長）

委員のほうから話があったのが指導者養成の部分と、あと中学生のトップアスリートの流出防止に向けた施策についてです。指導者養成については委員おっしゃるとおり、従来から本県の競技力向上に向けての大きな課題としてずっとありまして、いろんな会議の場でも御意見をいただいているところです。今すぐにどうこうするのはなかなかできない部分もありますけれども、私も国スポに行って実際見てみると、本当に指導者の方が熱心に

指導されて、その人のおかげで、先ほどもありましたけど県外から生徒さんこられて、陸上あるいはレスリングとか実績を上げている方々もいるので、そういった県内のいい事例も、できれば各競技団体に横展開といいますか、皆で共有したいなと思っています。

指導者養成にしる、ジュニア育成にしる、やはり競技特性がありますから、各競技団体において、中長期的な計画のもと、指導なり、指導者養成も含めて、計画を出していただいて、それについて県のほうでも支援していきたい、という状況であります。また、サッカーもいろいろ指導者養成のシステムができてと思うので、そういったところからも御助言をいただきながら、また先ほどインディゴソックスの話もありましたので、県内にも良い事例があるので、そういったものも取り入れてやっていきたいなと考えています。

◆事務局（体育健康安全課班長）

今、少し振興課さんからもお話があったとおり、指導者の育成ということに関しまして、教育委員会としても非常に重要な課題だと感じております。

本課の事業といたしましては、実際に先生に対してスキルアップ事業といたしまして、いろいろな方面から、例えば令和5年度でしたら、スポーツ振興課さんと一緒にやらせていただいたんですけども、筑波大学陸上競技部の監督さんに来ていただいて、世界に通用する選手の育成についてお話をいただいたり、実際、実技指導ということで、サッカーの選手も来てくれてたんですけども、陸上のみならず、サッカーの選手に対しての走り方のこととか、他競技でもいかなるような内容の講習会を実施いたしまして、陸上のみならず、いろいろな競技の先生に参加していただいて、指導力を高めるという事業を行っております。

また、指導力だけではなく、やはり安全とか、ハラスメントとか、そういうことも指導力の一つだと思っておりますので、その事業の中には、そういったことを盛り込みまして、指導者の質の向上というのにも図っております。また、「とくしま競技力向上指定校事業」というのをやらせていただいているんですけども、県内で21校に37部指定させていただいております。先生方にもそういう研修会に参加していただきまして、指導者の向上を図っています。指定校になった監督の先生には、県外等にも研修に行ってください、強豪校を視察していただくというメニューも盛り込んで、指導者のスキルアップに当たっていただいているところでございます。

あと、県外流出というお話もあったんですけども、その指定校に関しましては、中学生との交流の機会というのを各競技団体さんに御協力いただきまして、設けさせていただいております。県内でもこういう良い環境があるということを知っていただいて、中学生に選んでもらうということもやっているところであります。できれば、中学高校そして大学生まで、一貫して指導していけるというのが一番理想ではないかなと考えております。さっきスポーツさんから話があったように、県外から徳島の学校に来てくれる

生徒さんもいらっしゃいます。そのようなことから、県内の選手を育てていきながら、県外から来た生徒さんとともに、徳島県の競技力が上がっていくようなことになればと考えております。

○委員

16、17ページのところに書いてます、成人の週1回以上のスポーツ実施率が5年度は68%ということで、あと、17ページの、1回30分以上週2回以上実施しているというのが40%というのがあるんですけども、実際これ、成人ということなんですが、どれぐらいの年齢の割合の方が運動してるのかなというのが気になります。というのは、うちのクラブでも、やっぱり60代、70代の方が本当に圧倒的に時間もあるしということで参加率が高いんですけども、近年では、皆さんのような働き盛りの方たちの突然死というか、やっぱりすごく多くなってきてるような気がします。そういった忙しい人たちの運動習慣づくりというのが一番難しいと思うんですけども、その方たちにどういった形でアプローチすれば運動習慣につながっていくのかなというのを、早急に考えていったほうがいいと思います。一例として海陽町でも、ここに達成に向けた目標のアプローチの仕方ということで、「テクとく」の活用であるとか、総合型が地域で取り組むというようなことを書いているんですけども、もう一つ健診時の検査結果というのが数字で明確に表れますので、そういったものが動機付けにはすごくいいのかなと思います。そういうのを直に見たときに、メタボであったりとか、若い人たちが、運動習慣、運動しないといけないかなというようなことに気づくというのは、本当に動機付けになるのかなと思いますので、保健師さんへのアプローチだったり、特定健診時のその後の運動習慣づくりに結びつけていけるようなシステムとかをもう少し今後は考えていったらいいのかなと思います。

あと「テクとく」って県全体で、県民全体でできるものなんですけど、健康ポイントって全国的にいろんな自治体や徳島県の各市町村でやられていると思うんですけど、いろんな特徴があったりとかするので、他のところがどういったポイント事業して、あとは成果が出ているのかなというのも少し気になるころではありますので、そういう情報があればまた共有していただければと思います。

◆事務局（スポーツ振興課長）

スポーツ実施率等についてお答えさせていただきますと、こちら16ページ、17ページの数字というのが、実は県民全体のスポーツの調査というのではなくて、県民モニター、e-モニターという、いろんな県政の課題等について、実際に登録していただいている方々、成人ですね、成人の方が登録されていて、その中でいろいろ、毎年アンケート形式みたいな形で質問をしている制度があります。その制度を活用して、このスポーツの実施率等についても毎年お聞きをしているというところでございます。年齢別どれぐらいなのかとい

うところですが、やはりどちらかというと、20代、30代、40代の方が少ないかなと、比較するとですね、そんな状況ではあります。

委員のほうから、検診時とかに働き盛りの方々にその動機付けをする、運動習慣を身につけるといふ、それはすごく貴重な御意見いただいたと思いますので、今後参考にしたいと思います。

◆事務局（健康寿命推進課課長補佐）

ちょっと補足で、県民健康栄養調査の調査結果によりますと、運動習慣の定着につきましては、成人以上の調査結果にはなってきましたけれども、委員が御指摘されておられますとおり、働き盛り世代と言われる人たちよりは、御高齢の方、60歳以上の方のほうが運動習慣が定着している傾向にあるという数字が出ております。先ほどスポーツ振興課長からもお話がありましたとおり、働き盛り世代の方々につきましては、やはり30%少しといったところが平均というところではございます。直近で言いますと、令和4年に県民健康栄養調査をしたときには、20代から50代の方々につきましては、概ね30%切っておりまして、60歳以上になってきますと、例えば60から69歳の男性ですと、34.7%。女性のほうが33.3%と、大体30%を超えているというような傾向がございます。

次に、先ほど健診を受けていただいて、それを動機付けにするというようなお話がございました。確かに委員がおっしゃるとおり、私自身も経験としてありますけれども、健診結果の数値が悪いとなりますと、これはひとつ運動しないといけないなという動機付けになっております。一方、働き盛り世代の方々になぜ運動しないのか、というアンケートを国民生活基礎調査、国でしている結果がございまして、大体が忙しいからというような理由の方が多くいらっしゃるというふうに聞いております。

それから、健診の受診率につきましては、課題として、これまでも周知啓発に取り組んで、受診率アップに努めているところでございます。ただ、健診の関係につきましては、各保険者、例えば国民健康保険でありますとか、健保組合でありますとか、それぞれの保険者のほうで、受診勧奨をされておりますので、そういった関係団体と連携しながら、受診率アップに努めてまいりたいと考えております。

最後に、「テクとく」について御質問をいただいたかと思えます。「テクとく」につきましては、令和2年から、本格的に運用を始めておりまして、これまでのところ幸いなことに3万人を超える方々に登録いただいて、御活用いただいているという状況でございます。「テクとく」とそれから健康ポイント事業といったものにつきましては、確かに委員おっしゃるとおり、徳島県以外のところの自治体につきましても、新たに取り組まれているところが徐々に増えている状況でございます。ただ、取組としては始まったところが増えているというような状況で、まだ他県がどのような、例えば数値的にどれだけ登録者数が増えたですとか、あるいはそのポイント事業によって、そこに住まわれている自治体の

住民の皆様方の健康づくりといったところにどのような影響を与えたのか、というのはこれからでございますので、今後も他県の取組を研究してまいりたいと考えております。

○委員

私は車いすテニスのほうで、県のスポーツ振興課の御協力も得たりしながら、県下の学校に車いすテニスの体験会とか講演会みたいなのをさせていただいているんですけども、そちらで子どもたちに聞いてみると、車椅子テニスとかパラスポーツを知っている、ニュースとかテレビで見たことがあるという子どもたちがすごく増えてきているなという印象があります。ただ、実際に見たことがあるとかやったことがあるという子たちは、まだまだほとんどいないような状況に近いのかなというふうに感じてます。

今回の資料2、14ページの、令和6年度の取組予定のところに、にし阿波の事業で、車いすバスケの四国リーグを実施するという予定がされているんですけども、こちらは、例えば、近くの学校の子どもたちに見に来てもらったりとか、オンラインで中継するような計画とかもされてたりするのでしょうか。

◆事務局（西部総合県民局地域創生観光部課長補佐）

車いすバスケの件につきましては、すみません、当方が担当というところではございません。ちょっと今すぐこの場で、お答えできるような状況ではございませんので、また、担当課、保健福祉環境部に確認させていただいて、先ほど質問がありました件について、返させていただきたいと思えます。それでよろしいでしょうか。

○委員

はい。ありがとうございます。

せっかく開催を予定されているので、いろんな人に見てもらったりとか、ちょっとでも関わってもらえる機会が増えたらいいなと思ってます。

○委員

スポーツドクターとして参加させてもらってます。陸上競技協会の事務部長を2015年からやっております、ドクターではなくてちょっと陸上競技の観点から質問したいと思います。

資料1の9ページ、4-18スポーツで人とまちをつなぐ「ふれあいとくしま」の推進ということで、南部健康運動公園の整備事業についてなんですけれども、この陸上競技場、多分2021年ごろにオープンして、2022年に高校総体のサッカー競技が一部行われたと思うんですけど、サッカー終わった後ぐらいから、実は電源が壊れている状態が続いてまして、競技会で使うタイマーとか、電源がないものですから、発電機を使ってエンジンをまわし

で発電しながら競技を行ってる状況がここ2年ぐらい続いておるんですけども、この整備事業に、この修理内容が含まれているのかどうかというのをお尋ねしたいと思います。

◆事務局（都市計画課課長補佐）

委員御指摘のとおり、実は陸上競技場を開設しまして、昨年度、あるいは以前からかと思うんですけど、電気設備のハンドホールの中に水が大分たまり込むという事象が発生しております。

これを受けまして、昨年度から原因究明とかいろいろ調査をしまして、恐らく、もともと急峻の山奥の中を切り開いてできた陸上競技場ということがありまして、どうしても雨がちょっと集中的に降り込んだときに、水が入り込んでいるという状況を確認しております。そういうことを受けまして、昨年度から調査しまして、現在、対策工事のほう契約して、現場の作業準備にかかっております。いろいろ利用者の方に御迷惑おかけするところですが、今、そういう状況でございます。

○委員

陸上競技場は、鳴門のポカリ、あるいは徳島市の田宮の競技場も水がたまりやすいという、そもそも陸上競技場の構造がそうなっているんだらうと思いますが、ですから南部だけの問題ではないかなと思いました。

☆会長

それでは、御意見いただいている途中なんですけども、議事3、「その他」のところ、県から御説明をいただく事項がありますので、こちらのほうの報告を先にお願ひしたいと思います。よろしくお願ひします。

◆事務局

資料3に基づき説明

☆会長

はい。ありがとうございました。3つの議事の説明いただきましたので、続けて委員の皆様から御意見をちょうだいしたいと思います。

○委員

そうですね。懐かしい名前が、日本ハムという名前がでてたので、懐かしかったんですが、公式戦をするに当たって、いろんな多分問題があると思うんですが、まず例えば、集

客人数。確かプロ野球を呼ぶには、今、15,000人以上というのがあるので、それがクリアできるのかどうか。あと、雨が降ったときの室内があるかどうかなど、いろいろ問題はあるかと思うんですが、そこをしっかりとクリアしてもらって、是非誘致していただければ、多分、徳島としてもうれしいと思いますし、子どもたちもやっぱり見たいと思いますので、是非完成をしていただきたいなと思っております。

質問等とかではないんですが、オロナミンC球場ができることに当たって、あとは駐車場問題とかがあると思うんですが、その辺はどういうふうに考えてらっしゃいますか。

◆事務局（スポーツ交流課長）

オロナミンC球場自体が資料4ページに記載してありますとおり、2万人規模を予定しております。今鳴門のスポーツパークのほうでは、サッカーのヴォルティスさんのほうが開催して、2万人まではいってはいませんが、1万何人とかの実績がございますので、それを参考にしながら、臨時の駐車場とか、例えば、ヴォルティスさんもJ1の時でしたらシャトルバスとかだしてる事例もございますので、そういうことも含めて、おっしゃるとおり駐車場は非常に大切と思っておりますので、それも含めていろいろ検討してまいりたいと思っております。

○委員

二階建てとか三階建てとかいうのは考えてない。

◆事務局（スポーツ交流課長）

来年2025、2026でしたら、まだオロナミンC球場できておりませんので、蔵本むつみ球場とか、阿南のほうの球場をファームの公式戦でできないか今検討しているところです。おっしゃるとおり、むつみスタジアムにつきましては、駐車場が今250台ぐらいしかないところで、今シーズンでしたら、インディゴソックス対阪神戦がすごい賑わって3,000名を超える事例もあったと思うんですけど、その時も確かに駐車場が満杯で、県としましても近くの県の施設も駐車場として借りたりもしておりました。確かに根本的解決につきましては、多分駐車場の高層化とかあると思うんですけど、すぐにはなかなか難しいと思いますので、まずは私の所管のNPB開催の時には、そういう形で、臨時駐車場とかを確保していきたいなと考えております。

○委員

資料2、4ページのほうになるんですけど、ここ2・3年私も県の補助金のほういただいて活動させていただいているんですけど、来年、東京で世界陸上があります。オリンピックとか国スポとは違うんですけど、国際大会になってきて、あと来年、大学生の国際大

会で世界大会がドイツで開催されます。陸上競技以外の種目もあるんですけど、これは陸上競技の話になってしまうんですけど、世界陸上とかオリンピックに出るための基準が、参加標準記録ではなくなって、ポイント制度になります。日本の試合に出てもポイントを増やす試合はあるんですけど、やっぱり海外の試合に出たほうがポイントをたくさん稼ぐことができ、そのポイントを稼いで、ワールドランキング、世界のランキングで32番以内に入れば、標準記録を突破していなくても、日本代表のユニフォームを着れるチャンスが回ってくるという状況になっています。県の補助金をいただいて、遠征費に充てさせていただいてるんですけど、それ以外の補助を、何か、国際大会に出たいけど学生として出るには旅費もいろいろかかるし、大学からの支援というのもない中で、自分自身で行く試合になってしまうと、すごく高額な額を払って試合に行き、出て、帰ってくるっていうことになってしまうんです。少しでもそういった選手が、何か多少、全額とかじゃなくて、半額でもなくて全然大丈夫なんですけど、すごくずうずうしい気がするんですけど、ちょっと何か支援していただけたら、より上を目指して、世界で戦える選手になりたいと思う選手が増えてくるんじゃないかなと思ったりしてます。

◆事務局（スポーツ振興課長）

資料の4ページにありますように先ほど例示ありましたが、オリンピック・国スポ選手育成事業ということで、トップアスリートの方々に、個人に対して強化費を打つという事業をやっています。先ほど標準記録突破しなくても、世界大会、いろんな競技大会に行きポイントを増やせば、日本代表として出場できますという話があったと思うんですけど、ここはもう一回確認をさせていただきたいんですけど、当然、国スポ・オリンピックと銘打ってますけど、それを対象にしてる競技であれば、日本代表として、世界大会に参加するぐらいの実力があれば、ある程度この強化費というのは読み取れるのかなと思ってます。今日いただいた意見も踏まえて、競技種目の特性なんかもしっかり研究していきたいと思ってます。

それともう一点、大学生が国際大会に出るのに遠征費がかさむという話ですけども、出場する大会が国によってはかなり旅費がかかるというのはわかります。そういう声にお答えするべく、今年度、スポーツコミッションという別の、官民連携でスポーツ振興に取り組んでいこうという組織を作ってまして、そちらのほうで初めて、小中高生なんですけど、日本代表で世界に行った場合の遠征費を一部助成できるように制度を設けました。大学生までというわけではないんですけど、県としてはできるだけ支援をしたいというふうに考えてますので、できる範囲で考えていきたいと思っております。

○委員

資料2の17ページを見て伺いたいんですけど、皆さんの意見を聞いて思ったことがいく

つかあります。運動するにあたって、徳島出身なんですけど、地理的な要素でいいますと、雨・風多かったりして、屋外とかできる時間が限られてたりするんですけど、その運動できる場所が少ないなと感じてます。あと、市内とかは特に運動施設とかいっぱいあるんですけど、市外とかになると特に少なく、地域格差もあると感じるのと、最近だと公園とかでもキャッチボールできないところとかよく見かけますし、そういうので、運動習慣も減ってきているのかなと感じ始めてはいます。

あと、スポーツを始めるきっかけとして有名人を呼んだりというお話があったんですけど、やっぱり有名選手とかが来ていただいて実際に教えていただくことというのは、子どもの時とか、特に特別な印象に残るので、すごくそういうイベントももっと増やしてほしいと思います。

あと、とくしま健康アプリ「テクとく」についてなんですけど、自分もこの「テクとく」あまり知らなくて最近知った感じなんですけど、若者とかだったら、そういうの多分知ってる人も少ないと思って、友達とかだったら「ドラクエウォーク」とか、「ポケモンGO」とかをしてる子が多くて、その子も、そのおかげだと思うんですけど、歩く機会とかが増えたっていう話は聞いています。

あと、大学の先生にアドバイスもらったんですけど、大学のスポーツの発展みたいな形で大学と地域とが協力して地方創生につなげるみたいなアイデアです。大学スポーツの発展によって、大学、徳島県大学少ないですけど、大学の学生につながったり、そこから学生数も増加したり、それでさらにそこに住む学生さんとかによって経済の活性化にもつながるということで、プラスな面も大きいという話をいただいて、徳島県にはあるかわからないですけど、理学療法とかで研究してる場合なんですけど、スポーツに関する体の使い方とかの研究とかもいっぱいあって、その大学と地域とが協力して、そういうスポーツの取組だったり、研究だったりをしていくのもひとつのアイデアとして提案します。

◆事務局（スポーツ振興課長）

一つ、運動する場所が地域格差も含め、少ないんじゃないかというところですね。市町村でもいろいろ社会体育施設とかもあって、最近で言えば那賀町で新しい体育館ができた、阿南市でも新しい体育館できたりとか、各市町でもそういう環境の整備がされると思うので、既存施設も含めて、有効に活用できたらいいなと思ってます。

イベントを増やしたらどうかというのはもうおっしゃるとおりで、こちらも、先ほどの説明でもありましたけど、昨年度でいえば卓球の石川佳純さんに来ていただいて、そのすごい申し込みがあって、大部お断りもした感じでたくさん来ていただきましたし、本年度も野村忠宏さん、柔道3連覇の方も11月30日にお呼びするようにしています。こういう、子どもさんと超一流の、本物というかアスリートの方と一緒に触れ合えるような、そういう機会はどんどん作っていきたいと考えてます。

それから、スポーツをいかした地方創生、それも大事な視点だと思いますし、スポーツを通じて、人と人、地域と地域をつないで地域を盛り上げていく、まさにそれはもう我々もそういうふうにしたいたいと考えておりますので、また学生さんからもいろいろ意見もいただきながら、しっかりやっていきたいと思っております。

◆事務局（健康寿命推進課課長補佐）

「テクとく」について御意見等ありがとうございます。「テクとく」につきましては、もともとの施策のスタートというのが、働き盛り世代の人に何とか運動していただいてその定着を図っていかうというねらいがございまして、課金せずに参加できる、というのがまず一つございます。そういうスタートがあったものですから、若年層に対するアプローチというのは、あまり積極的にやっていないところがございます。ただ、今後この「テクとく」を使い続けていただくであるとか、あと、先ほども御指摘があったとおり、働き盛り世代の運動習慣の定着を目指していくのであれば、そういった若年層の方々に対するアプローチも非常に大事だと考えております。

今おっしゃっていただいた御意見も踏まえながら、どういう方法で若い人たちにも使ってもらえるか、というのは研究してまいりたいと思っております。

○委員

常日頃は観光のほうやっているものなので若干違うかと思っております。でも、今日わからないこととか、知らないこと、よく勉強させていただいてよかったなと思っております。

「テクとく」の話題になって、私もそこに参加することとなれば、観光していますので、どうしてもJALアプリのほうでやっております。そうすると、マイルに反映されてしまうのでというふうに、一度「テクとく」のほうも紹介されたことはあるんですが、やはり、少しそっちのほうに向いてしまって、何か次につながるっていうのをやっぱり考えてしまって、すいません、「テクとく」は使っておりません。

スポーツという観点からすると幅広く、裾野を広げていくというのはとても大事なことですし、観光面から、変になるんですけども、最近、外国の方なんかは歩き遍路をたくさんしておりまして、それが健康のほうにつながるかどうかというのは、歩くってことはいいことからすると、本当に、外国の方ですね、台湾とか、欧米の方も歩いたり、あと自転車で回られてる方もたくさんいるので、そういう面ではスポーツのほうに広がっていけば、お遍路っていうのは四国にしかないものですから、そういう面で足腰を鍛えていくと運動にもつながって、子どもの頃から育ってきておりますので、また違った見方として広がっていくっていうのはいいのかなと思っております。

○委員

先ほど、オロナミンC球場の改修のところで、弊クラブの試合の時に17,000人ぐらい、最初のJ1のガンバ大阪戦が多分最高の数字だと思うのですが、駐車場を増やす増やさないという話がありました。当然駐車場があったとしても、今度渋滞が起こるといところがあって、近隣に御迷惑がかかるという話もあります。今年ありがたいことに、皆さんのおかげで観客1万人以上の試合が3試合組めたのですが、一番考えるのは渋滞対策。駐車場どうしようといところ、来てもらってもいいのですが、渋滞に巻き込まれて新しいお客さんが嫌な思いをして帰ったらどうしようとか、そういうことはどうしても考えてしまうところ。で、やはり駐車場、車っていところだけじゃなくて公共交通とか、そもそも交通アクセスといところがより重要かなと。駐車場、車移動に頼らないで、いかにそういう公共交通で運んでいかといところも、大きな視点として持っていけないのかなと思っています。

特に、11月から香港の定期便も飛ぶといところで、これスポーツと関係はないのですが、利用される方がやはり外国人の方なので、車を運転しない方もいるだろうし、また、ワールドマスターズゲームズ関西も控えているといところで、より交通アクセスといのが重要になってくるのかなと思います。ハードの整備は当然我々としてもありがたい話ですし、ハードを整えばそういった試合環境も含めてこれはありがたいところですが、見に来るお客さんとか、そういうところに関しては、この交通アクセスとい観点もあわせて考えていっていただけたらなと思っております。

☆会長

駐車場については、私どもの協会も含めて努力をしていきたいと思います。御協力よろしくお願ひします。

○委員

先日、佐賀県で開催されました第43回全国障害者スポーツ大会から帰ってきたばかりですので、それもあわせてお話をさせていただきたいと思ひます。連日、新聞に関連記事が掲載され、選手の皆さま方はとてもうれしく感じておいでました。全国障害者スポーツ大会の在り方は国スポの在り方と同じように変わっていくのではないかとと思ひますが、公益財団法人日本パラスポーツ協会にお伺ひすると、国民体育大会は名称が国民スポーツ大会に変わりましたが、全国障害者スポーツ大会の名称変更はすぐにはないといこと。です。

また、今年9月に、パラアスリートの発掘を目的に、日本パラスポーツ協会主催のJ-STARプロジェクトを徳島県で開催しました。まずは、スポーツの裾野を広げ、スポーツを親しみ楽しむといところに、今私どもパラスポーツ協会は力を入れております。理

学療法士会、作業療法士会、トレーナー協会の方々に、特別支援学校だけではなく特別支援学級にも行っていただき、スポーツの楽しみ方を御指導いただいております。次に、障がいのあるなしに関わらず地域でスポーツができる環境づくりを行っております。日本パラスポーツ協会公認パラスポーツ指導員、地域においでるスポーツ推進員の方々、総合型地域スポーツクラブとマッチングを行い、地域における環境整備を中長期的に考え、パラスポーツの裾野拡大・普及、パラアスリートの発掘、競技力の向上に努めていきたいと考えております。

☆会長

パラスポーツの現状含めて、御意見いただきました。大変ありがとうございました。

○委員

進捗状況のいろんな数値ですが、当然、予算獲得の上で数値がすごく重要になるというのはわかっています。ものによっては相対的な評価をしたり、絶対的な評価をされているものもあると思うんですけども、例えば、一例として、何%上がったとか下がったとか、それに一喜一憂するのはもちろん大事なんですけども、前年度とずっと同じ人じゃなかったりするわけだと思います。その辺り、その継続性を一部評価したりとか、割合は下がったけれども前年から続けた人が逆に増えてるとか、そういった見方もできればいいかなというふうに思っています。それはちょっとテクニックの問題だと思います。

あと、最初のほうにもこの話ありましたが、国スポはそんなに重要視しないというか、徳島県は4年に1回出ればいいんじゃないか、というようなスタンスで今まで来たんですけども、ただその一方で、今大学の教員をしている関係でいうと、どんどんどんどん中学校も含めて全国大会が種目によってなくなってきたり、また全国大会出場することによって、その後大学の進学だとか、就職とかにすごく高校生とか、大学生が影響してるという現状を見ると、そういった全国的な規模の大会がなくなってくるのは少し悲しいかなと。ただそれも同じような人、常にトップレベルの人たちばかりが集まるよりも、もう少し裾野を広げてもらえるといいかなと思います。そういった意味で、この国スポの意義というものも、むしろ地方のこういった点からも、国のほうに意見なりアピールぐらいしていったらいいんじゃないかなというふうに思います。

あと、いろいろスポーツの指導者とか育成とかということが出てきていたと思います。サッカー、ヴォルティスさんとかインディゴさんとか、もちろん最近にはガンバロウズさんとかもありますが、ある意味、地元から育った人たちが今コーチとか指導者になってるというよりは、ある程度いろんなトップたちが集まってきているような状況ですから、当然指導体制ってのはしっかりするのはある意味当たり前のことで、むしろそうじゃなかったらプロとしてやっていけないとこだと思います。今課題なのは、その中学校、高校といっ

た学校レベルでの育成って話になると、僕らもスポーツ科学という立場の教員であるんですけども、やはり未だに大学生ぐらいであってもスポーツ科学という言葉を知っていながら、その客観的な物の見方、つまり自分の体を客観的に評価したことがない。いろいろ体力測定的なことはやってても、もっとそれ以上に深く動作解析、動作を分析したことがないとか、自分の身体的な能力がどんなものなのか、例えば生理学や手法がどうなのかって知らない学生が、それでもトップのほうに行ったりとか、結局そういう子たちがまた指導者になっても、結局同じように繰り返されてるわけです。つまり何が言いたいかっていうと、小さいときに、今も県のほうでずっとやってると思いますが、無償のあいつた測定器等を使って、自分の体力を知る。きっとそれは、10年後、20年後自分たちが指導者になったとき、同じように子どもたちにそれが繰り返されるということで、少しずつそういった意味では、ジュニアの選手の育成と同時に、実はそれはジュニアが大人になって指導者になるときの、底辺の部分、基礎的な部分になると思いますので、ぜひいろんな競技団体はそういったものをうまく活用して、指導者養成とか育成とかにつなげていていただければと思います。

最後にもう一つだけ、パラのスポーツ関係、実は私も車椅子テニスを徳島で普及させたひとりとして、ずっと育成事業というのはすごく重視してるんですけども、やはり指導者がなかなかいないのも問題ですけども、最近だと、総合型スポーツクラブとかもできてますので、そういったところと連携されたりするのもいいと思います。やはり、パラのスポーツ、障がい者のスポーツ、それはそれで独自性をどんどん貫くのが大事だと思いますが、その一方で、健常者と交流をする場をもっともっと作らないといけないかな。それは健常者の方たちと接触する機会をつくるという意味でも、スポーツを通じての交流、コミュニケーションづくりという意味でも、パラスポーツとともに利用していただけるようなシステムがあればいいのかなというふうに思います。

◆事務局（スポーツ振興課長）

貴重な御意見いただいたんで、それを踏まえて来年度の事業の予算獲得も含め、検討していきたいと思ってます。

一つは、動作解析云々という話もあったんですけど、今我々もデータに基づく指導であったりとか育成であったり、そういった部分を今の時代、活用していく必要があるだろうということで、スポーツDXという部分で、いろいろ活用の仕方はあると思うので、また来年度の事業でも反映していけるようにやっていきたいと思ってます。

あとパラスポーツの交流の場ですね、総合型地域スポーツクラブとの連携。これも、パラスポーツ協会としても、実際にクラブとの連携も生まれてますけども、こちらのほうも、もっともっと連携できるようにやっていけたらなと思います。

あと、ジュニアの育成こそが指導者の育成につながるというのは、確かにそうかなと感

じましたので、貴重な御意見と受け止めて、また施策のほうにも反映できたらと思います。

☆会長

ありがとうございました。委員から一点御質問いただいています。

「輝くとくしま」の施策の中で、トップアスリートによる講演や講習がもっと増えればいいかなと、そういうふうに考えます。理由としましては、御自身が高校時代までは全国大会と無縁でしたけれども、社会人になってトップアスリートと触れ合う機会がきっかけになって、もっと上を目指そうと、そういう思いになりました。と、体験談から一つ御質問いただいています。

◆事務局（スポーツ振興課長）

トップアスリートとジュニア世代、またジュニアの保護者の方々とも交流の場を、社会人になっても交流の場をということでございます。昨年度も、石川佳純さん以外にも村田諒太さんであるとか、水泳でしたら、オリンピックの寺村さんとか青木さん、それから、お正月に徳島県のJリーガー全員に集まってきていただいて、数百名の小学生と交流をしたり、といった事業もやっております。是非、このあたりは来年度以降もしっかりやっていきたいと思えます。

☆会長

ありがとうございました。

令和9年度が終期になりますこの計画ですので、私どもの審議会のほうもしっかりと進捗状況について毎回チェックを進めていきたいと思えますので、引き続き御協力をよろしくお願いいたします。

閉会